真実委員会という選択
――紛争後社会の再生のために

阿部利洋　著

2007年刊行の『紛争後社会と向き合う：南アフリカ真実和解委員会』（京都大学学術出版会）において南アフリカ共和国（以下，南ア）の真実和解委員会（以下，TRC）を包括的に叙述・分析した著者が，続いて発表したのが本書である。前著に比べやや小振りな外観やタイトルから判断して南アTRCの入門編かとこの本を手に取った読者は，やや驚くかもしれない。

本書は南アのTRCをもちろん随所で取り扱っているものの，叙述は真実委員会という取り組み全体にわたっており，舞台はカンボジア，アルゼンチンなど世界に広がる。そして何より目を引くのが，各国の真実委員会の制度や実践に関する解説や史的な叙述には，ほとんど紙幅が割かれていない点である。そして著者は，前著と異なって全編に「私は」という一人称で登場し，真実委員会という手がかりをもとに，「真実」とは何か，「和解」「赦し」によって何が生まれるのか，逆に重要な何かが否定されることはないだろうか，といった問いに向き合い続けるのである。

真実委員会によって「被害者のどの証言も国民統合の物語に収斂させられる」という解釈の存在（p.34, 128）。「真実と和解に関する公式の定義がない」（p.81）ことから著者がジョージ・オーウェルの『1984年』に登場する「真理省」を想起する場面（p.84）。「赦しは……加害者の対応によって被害者の自律性が左右されないために必要なのだ」というツツの発言。そして「（真実委員会は）奪われて，奪われて，最後に残ったもの」という言葉への著者自身の共感……。時に迷い，立ち止まりつつ考察を重ねる著者と共に，読者である私たちも「真実」「赦し」といったものの意味や，それらの限界について考え続けることになる。

日本でも，殺人事件で遺族となった人たちの公判参加，厳罰化や死刑制度の存続など，紛争と「赦し」のはらむ可能性／問題性に注目せざるを得ない状況が続いている。アフリカ研究にとどまらず，さまざまな観点から読まれうる，豊かな思索の書である。

（津田みわ）

東京　岩波書店　2008年　216p.

南アフリカの土地改革

佐藤千鶴子　著

南アフリカ（以下，南ア）の白人支配は，人口で多数派を占めるアフリカ人の土地を奪うことを基盤として成立していった。現在，南アでは土地改革が進行中だが，隣国ジンバブウェの状況を持ち出すまでもなく，土地改革の帰趨は，南ア社会の将来にわたる安定を左右しかねない重要性をもっている。

本書は，この難題に正面から取り組んだ本格的な研究書である。土地改革はしばしば農地改革と同一視されるが，著者は，多くの人々が居住地からの追い立てや強制移住の辛酸をなめさせられてきた南アにおいては，農地よりもまず安定的な居住地を確保することに土地改革の意義があると主張する。このことは，土地改革をどのような尺度で評価すべきかにも関わってくる。すなわち，民主化初期の土地再分配事業では，貧しい人々が集団で土地を購入する形態が主流であったが，こうした土地は人口過密・過放牧になりがちで，ホームランドの貧困と環境破壊を再生産しているだけだとの批判を生んだ。このため南ア政府は1999年以降，土地再分配の重点を，貧困層による集団的土地購入から，もともとある程度の資産を有する個人や家族を新興農民として育成することへとシフトさせたのだが，著者はこの政策転換には批判的である。

本書は，人々の主体性を重視する社会史アプローチの影響を受け，政府レベルの動きに加え，草の根の人々の自発的な運動に光を当てて，南アの土地改革プロセスの多面的な理解を提供している。南アで本格的な土地改革が始まったのは1994年の民主化以降だが，著者は，それに先立つ1990年代初頭から，かつて強制移住を経験した人々らが組織化して独自に交渉を行い，土地の回復を実現していったこと，またそこでの議論が民主化後の南アの土地政策に反映されたことを指摘している。なお，本書所収の３つの事例研究のなかに，土地をめぐる暴力的対立は出てこない。外部NGOの支援などを受けながら，人々があくまでも交渉やストライキなどの非暴力的な手段によって土地を手に入れていったことが印象的だった。　（牧野久美子）

東京　日本経済評論社　2009年　ix+252p.

経済発展の計量分析

中村亨　著

本書は，発展途上国の金融危機，債務問題および援助に関する実証分析を主題としており，後半の４章はサブサハラ・アフリカ諸国に焦点があてられている。

累積債務が深刻なアフリカを中心に，重債務貧困国に対する債務救済が現在行われている。債務救済の理論的支持として，多額の債務は債務国の投資インセンティブを損なう可能性が提示されたが，著者はこれを巡る理論と実証の研究成果を紹介している。また，自らも実証分析を行い，重債務国でも多くの国では債務が投資を抑制する効果は見られないが，経済成長を減退させている可能性があると結論づけている。さらに，重債務国の経常収支にも分析を進め，債務救済が経常収支を持続可能なレベルまで改善させたかどうかを検証している。先行研究の推定モデルをアフリカ諸国にあてはめたところ，ベニンなどの４カ国以外はいずれも持続可能な状態ではないという結果が示された。ただし，救済以前のデータも推定に利用されている点が解釈を難しくしていると評者は感じる。

また，アフリカでは援助の有効性も大きな問題であり続けている。援助は経済成長を促しているのか，さらに近年では貧困削減に貢献しているかという疑問が投げかけられる。著者は，援助の有効性に関する先行研究を整理するとともに，ケニアとガーナのマクロ経済データから援助と成長の関係を，途上国49カ国のデータから援助と貧困削減の関係を推定している。後者については，援助を細分化して効果を推定すると，教育，健康，所得などの貧困指標に対してそれぞれ異なる種類の援助が効果があると示された。ただし，効果は小さくMDGの達成のためには大幅な援助の増加が必要と結論づけている。

いずれもアフリカ開発において重要な問題であり，多くの経済学者が取り組んでいるが，政策立案に利用できるほど頑健な関係はいまだ見い出されていない。手堅い計量経済を利用した本書での分析は，そうした試みへの貢献である。この研究分野に関心のある読者に，本書を手がかりにすることを薦めたい。（福西隆弘）

京都　晃洋書房　2008年　xiii+226p.

現代アフリカの公共性
――エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践

西真如　著

本書は，2006年に提出された博士学位論文に，2008年までに行われたフィールド調査の成果などを加筆したものである。本書の中心となるのは，著者が長年調査してきたエチオピアのエスニック・グループであるグラゲによる，グラゲ道路建設協会の活動である。

本書の構成は８章からなる。第１章「それは可能だ」，第２章「差異・配分・公共性」と第３章「アフリカ市民社会とエスニシティ」では，主に先行研究レビューが行われている。

第４章，第５章で調査地や歴史的背景を概観した後，第６章では，首都アジスアベバで活動するグラゲ道路建設協会の初期（1960年代）の活動をとりあげている。協会設立時の目的は，首都から150キロメートルのところに位置するグラゲ県での道路建設であった。協会は，建設費調達のために政府に働きかける一方で，活動への支援獲得のためにグラゲの農村社会の人々とも交渉を行ってきた。その活動は，農村支配を志向する国家とは異なり，都市と農村間の「新たな社会関係を創出する試み」（p.151）であったと著者は分析する。

この協会は1988年に自助開発協会と名称をかえ，現在では学校建設などの事業も行っている。第７章では協会の一支部委員会の活動をとりあげている。その中でも興味深いのは，委員会と首都の葬儀講との協力関係である。葬儀講は本来葬儀のための相互扶助組織であるが，この委員会は，葬儀講と交渉を重ねることで，そこから活動資金を獲得している。そのプロセスは，都市から農村への「民主的な再配分への実現」（p.186）であると著者は指摘している。第８章では，アジスアベバの葬儀講一般をとりあげ，住民組織がもつ他者に対する排除と配慮のメカニズムを分析している。

具体的な目的（ここでは道路建設）のために活動している住民組織が，その目的達成ということにとどまらず，都市と農村を「民主的」に結びつける重要な役割も果たしていることを，本書は具体的な事例から明らかにしているのである。（児玉由佳）

京都　昭和堂　2009年　266+xxiii p.

アフリカと政治
紛争と貧困とジェンダー
――わたしたちがアフリカを学ぶ理由

戸田真紀子　著

ユニークなアフリカ入門書である。まずはその少々厳めしい感じの表紙で，太いゴシック体の書名と，サブ・タイトルに並んだ用語はいずれも重い。装丁と一体化した帯にあるメッセージも，「ですます」調の言い回しながら，アフリカをめぐる深刻な課題を読者に問いかけつつ，著者の執筆意図を明確に述べている。

本文は２部構成で，それに先立ち序章「アフリカを勉強する10の理由」が設けられている。著者は冒頭の「アフリカについて皆さんが知っている言葉には，どんなものがあるのでしょうか？」という問いで読者を引き込み，問題の原因を示唆しながら，アフリカを学ぶことの難しさも指摘している。

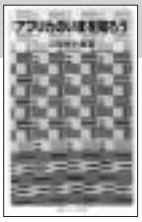
第Ⅰ部「アフリカの「民族紛争」の神話と現実」を開くや，アフリカの人びとを部族と呼ぶか，民族と呼ぶか，という問いが読者に投げかけられる。その呼称を後者で貫く姿勢を示したのち，その起源と多民族社会としての実態に話を進めてゆく。民族紛争は著者の主要研究テーマの１つであり，その蓄積をふまえつつ第２章で民族紛争の理解を妨げている「神話」を，第３章以降ではその「現実」を描き出そうとする。紛争犠牲者とその原因，複数政党制選挙を中心とした民主主義とルールの問題を論じ，著者のフィールドの１つであるナイジェリアの「宗教紛争」に議論を展開してゆく。これは第７章の事例研究への導入でもある。

第Ⅱ部「ジェンダーから見るアフリカ」では，アフリカの女性をめぐる問題をいくつかの切り口から紹介し，とくに宗教と女性にそれぞれ１章を割いている。

各章に図表がふんだんに盛り込まれており，章末にまとめて掲載されているコラムとともに，読者の理解をたすけている。奴隷貿易や植民地支配に問題の起源を求める著者の歴史観はオーソドックスなものであり，そうした理解が今日でも妥当であることは間違いない。このような歴史の重荷に立ち向かう人びと，とくに女性のしなやかな姿を紹介した終章を，もう少し詳しく読みたいと思うのは評者だけではあるまい。

（望月克哉）

東京　御茶の水書房　2008年　vii+212p.



アフリカのいまを知ろう

山田肖子　編著

皆さんは，「アフリカ」と聞いて，何を思い浮かべますか？（本書「はじめに」冒頭より）

――というわけで，評者も周囲の数人に聞いてみた。返ってきた答えは「砂漠」，「野生動物」，「（色彩豊かな）布」……。評者も10年ほど前，ガーナに青年海外協力隊員として赴く知人に壮行会の記念品としてロッテチョコレートを送ったが，これが当時の自分が抱いていたガーナ（ひいてはアフリカ）のイメージだったと思う。2008年５月に横浜で開催された第４回アフリカ開発会議を知っている人なら，貧困，開発，平和構築，環境問題，人間の安全保障といった言葉を思い浮かべるかもしれない。

編者によると，上記のようなイメージは「驚くほど多様でダイナミックなアフリカ社会の一部」でしかない。だったら，アフリカが見せる他の顔は一体どんなものなのだろうか？　もしそう思ったら，ぜひ本書を手に取ってみてほしい。

本書は二部構成になっている。第Ⅰ部は，編者によるアフリカの歴史，経済，政治，社会，文化の概説である。40ページ程の紙幅で，コンパクトにアフリカの歴史と現状を俯瞰することができる。

第Ⅱ部は，アフリカ研究者11名へのインタビューをまとめたものである。研究者の専門は歴史学，政治学，経済学，国際関係学から文化人類学，医学まで多岐にわたる。それぞれが取り組むテーマも，開発，援助，紛争解決に始まり，文学，ジェンダー，ろう者，音楽，仮面結社まで多種多様である。それでいて，すべての研究者に共通するのは，アフリカをグローバル化と国際社会の中に位置づけながら，現地の事情や価値観，論理を丁寧に見ているという点である。

本書のタイトルと内容が微妙に一致していないような気もするけれど，11の複眼レンズを通して映し出されたアフリカが，評者も含め紋切り型のイメージをつい抱きがちな人たちに，この大陸をさらに深く多面的に考えるきっかけを与えてくれることは間違いない。

（岸　真由美）

東京　岩波書店〈岩波ジュニア新書〉2008年　vi+245+3p.

流儀
――アフリカと世界に向かい我が邦の来し方を振り返り今後を考える二つの対話

稲場雅紀・山田真・立岩真也　著

本書は立岩真也・立命館大学教授を代表とするCOEプログラム「生存学創生拠点―障老病異と共に暮らす世界の創造」の中間成果で，またアフリカ日本協議会・国際保健部門ディレクター稲場雅紀氏，医師山田真氏と立岩氏の共著となっている。

まず本書で目を引くのが２段組のレイアウト。上段に２つの対談を再録しており，下段に著者による論考が並ぶ。そこに再録された対談の１つは医の現場における告発の流儀を語る山田医師と立岩教授によるもの。もう１つは稲場氏と立岩教授による対談で，そこではエイズ政策を中心にアフリカへの向きあい方について国家論，地域論，セクシュアリティ論などの視点から議論が展開されている。特に横浜寿町日雇い労働運動への関与に始まる稲場氏のこれまでの思索と活動の軌跡が対談を通して再現される。

本書を通して振り返るならば稲場氏の思想と実践は，ヘテロセクシュアル世界とその世界観が持ち，非ヘテロセクシュアリティに対し行使しうる暴力性を世に問い，行動することから始まっている。その後，在日外国人が持ち込んだセクシュアリティとエイズ問題について，日本政府が対処不能に陥っている状況を告発する。さらに，在日アフリカ人のエイズ問題への取り組みを通して稲場氏に見えてきたのは，日本のアフリカ政策の問題点である。その眼には，独自のアフリカ観が圧倒的に欠如したまま援助政策が一部の権力によって作られ，問われることなく再生産されつづける構造的問題と映る。その冷静な視座は，日本の対アフリカ政策を「経済成長を通じた貧困削減というのは…（中略）…結局，単に経済成長だけをするということであって，それを通じて『貧困削減をする』というのは，単にポリティカルコレクトネスとして付け足されているにすぎない。」（p.57）と喝破する。

評者は10年後に本書が日本のアフリカ政策転換のメルクマールをつくったと書かれることを期待したい。

（吉田栄一）

東京　生活書院　2008年　267p.

現代アフリカの紛争と国家
――ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド

武内進一　著

400頁を超える大著である本書は，著者の10年以上にわたるアフリカ紛争研究の集大成である。３部構成をとり，第１部では紛争の「大衆化」や「民営化」といった概念により1990年代に多発したアフリカの紛争の特質が整理された後，このような紛争の特質を形作ったのはパトロン・クライアント関係によって維持されてきた「ポストコロニアル家産制国家」の解体にあるという著者の仮説が提示される。第２部と第３部では，1994年のジェノサイドによって莫大な犠牲者を出したルワンダ紛争を事例に，前植民地期から植民地期に至る時期と，独立後からジェノサイドに至る時期それぞれにおける国家と農村社会の関係の変容を辿ることを通して，「ジェノサイドという究極の暴力がルワンダの歴史のなかでいかに準備されたのか」（p.17）という問いに対する答えが導き出されるとともに，第１部で示された仮説が検証される。

ルワンダにおいてエスニシティが固定され政治化された過程や土地制度をはじめとする農村社会内部の主従関係を支えたさまざまな制度の変容に関する緻密な歴史分析，独立後のルワンダ政府の権力構造の解明など本書の魅力をここですべて紹介することはできない。以下，評者が最も強く印象に残った第３部第11章「ジェノサイドの展開」についてのみ簡単に述べたい。ここでは，ハビャリマナ大統領搭乗機撃墜後，首都キガリで政権内の急進派がトゥチや穏健派要人の組織的虐殺を実行していった過程と首都から離れた地方の農村で虐殺が展開された過程が再構成されている。これらは，人権NGOの報告書や裁判記録などの文書資料のみならず，著者自身が刑務所や調査地農村でジェノサイド罪の容疑者と住民に対して行った聞き取りに基づくものである。地方の農村における虐殺の規模や悲惨さにも驚かされるが，地方行政官や軍，警察，教員などのローカルな有力者が主導した虐殺に，フトゥの有力者との関係断絶を恐れた多数の「普通の人々」が加担し，トゥチの隣人や親戚の虐殺を行ったという著者の分析には改めて震撼させられる。　（佐藤千鶴子）

東京　明石書店　2009年　462p.